

教授に就任して



教授に就任して

口腔生化学分野教授 照 沼 美 穂

平成28年8月1日付で口腔生化学分野の教授に就任いたしました、照沼美穂（てるぬま みほ）と申します。私は茨城県日立市に生まれ、父の仕事の関係で幼少期の8年ほどをブラジルのリオ・デ・ジャネイロで過ごしました。言葉もわからない国に突然行ったのですが、現地の学校に通ったことから、ポルトガル語を覚えるのと同時に友達も増え、性格も次第に明るくなっていったような気がします。

茨城の高校を卒業後、南米のように暖かな所に住みたいと九州大学歯学部に進学しました。福岡に行ったことのある人はわかると思いますが、夏は非常に暑く、博多駅前から海に向かって伸びる大博通りのヤシ並木が南国に来たな～と実感させてくれるのですが、冬は意外に寒く、雪も降り（日本海に面しているので当然と言えば当然なのですが）、逆に騙された～となるのです。そのような中で過ごした大学生活はとても楽しく、歯学部サッカー部のマネージャーとして部活動に精力を注いだほか、友人たちとの旅行では国内外をあちこちまわりました。実はオールデンタルでラグビー部を応援するために冬の新潟に来たこともあります。

卒業後は研修医をせずに大学院に進学しました。学部時代から出入りしていた口腔生化学講座の平田雅人教授（現・九州大学名誉教授・福岡歯科大学客員教授）のもとで細胞生物学や生化学の研究手法を学び、平田教授と兼松隆准教授（現・広島大学歯学部細胞分子薬理学講座教授）が発見

されたカルシウムシグナリングに関与する分子PRIPの中枢神経における機能の解明を研究テーマとしていただきました。歯学部でなぜ中枢神経の研究？と思われるかもしれませんが、歯学を「口腔医学」と位置付けて、広い視野を持って口腔の研究を行うという考えが最近言われるようになってきたことから、私はこれからの歯学の発展に大変重要な研究であると考えています。

大学院での研究は、研究室に籠るだけでなく、海外で勉強する機会をたくさん頂きました。1年目の冬は韓国の浦項理工科大学（POSTECH）で過ごし、学生寮で韓国人の大学院生とルームシェアをしました。クリスマスもお正月も帰国することができない決まりだったため、現地で仲良くなった学生たちと一緒に寮で過ごしました。講座の先輩が日本から送ってくださったカップの年越し蕎麦を食べたことが懐かしいです。その他にも英国のユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）には2年連続で短期留学させていただき、神経科学研究の基礎を学びました。この時に勉強させていただいたStephen Moss教授の研究室に、ポスドクとしてその後お世話になることになりました。

学位取得後、私がMoss教授の研究室に所属する頃には、研究室はなんとアメリカのフィラデルフィアにあるペンシルベニア大学に移動していました。欧米では、研究室を主催するようになった後でも数年単位でどんどん大学を移動することは、珍しくはありません。実際に私がフィラデル

フィアに移った3年後には、研究室はボストンのタフツ大学に移転することになります。結局Moss研究室には大学院時代も含めて8年半、3つの大学で研究しました。私がMoss研究室を選んだ最大の理由は、Moss教授が、痛みの軽減や鎮静効果がある抑制性神経伝達物質GABA（ギャバ）を介した神経伝達機構研究の第一人者だったからです。神経伝達の仕組みを解明する研究以外にも、様々な神経疾患や精神疾患の原因を解明する研究を行うことができ、基礎から病態までを幅広く研究できる研究者として、徐々に成長できたと思います。

そして2013年には、イギリスのレスター大学で自らの研究室を立ち上げることができました。研究室を主催する立場になると、外部資金の獲得が必要になってきます。それまでにもアメリカでグラント獲得の経験はありましたが、イギリス特有の膨大な書類の準備には悪戦苦闘しました。しかし、研究費を獲得して学生達と共に研究を行うことはこの上ない喜びで、自分の研究室を持つことの楽しさを実感する日々でした。加えてイギリスでは新米大学教員は全員、高等教育の専門家になるために高等教育の修士過程を修了し、英国高等教育アカデミー（Higher Education Academy: HEA）のフェローになることが義務付けられています。そのため講義や研究指導の合間をぬって私自身が教育者になるために様々な講義を受けました。最終的には修士論文を二つ書き、修士号を取得して、無事にHEAのフェローになることができました。イギリスには3年ほどいましたが、その間にはスコットランドの独立住民投票や帰国間際のBrexitなど、イギリスの将来を揺るがす大きな出来事がいくつもあり、現在も

なお揺れていますので、今考えると帰国を決意したのは間違いではなかったのかなと思います。

さて、新潟大学に着任して早1年、日々口腔生化学分野の研究と教育に従事しているわけですが、まず新潟に来てよかったのは知り合いが意外にもたくさんいることです。小児歯科の早崎治明教授、斎藤一誠准教授、岩瀬陽子助教は大学の同窓生ですし、医学部機能制御学分野の神吉智丈教授は大学院時代に同じフロアで研究していました。またアメリカ時代の知り合いや国際学会で知り合った先生も多くいらっしゃり、着任当初から大変お世話になっています。さらには前田健康学部長をはじめ、歯学部の先生方がとても良くしてくださるので、ほとんど苦勞することなく仕事できています。

生化学は生命現象を科学的に解明する学問であり、どの分野の研究を行うにしても、メカニズムを知ろう、解明しよう、とするのであれば絶対に学ばなければならない大切な学問です。私の専門である生化学・分子細胞生物学を脳神経研究に限らず、今後は歯科臨床研究と基礎研究の橋渡しをすべく、様々な細胞やがん細胞でも行っていく予定ですので、興味のある方は是非ご連絡ください。

最後に、新潟大学口腔生化学分野では歴代の教授が様々な専門の研究を行ってきました。このような講座の後任を担当させていただくことは、大変光栄なことですし、同時にプレッシャーも感じています。今後とも、オリジナリティーに溢れる研究を行い、分野のさらなる発展に貢献できるように精いっぱい努めさせていただく所存です。どうぞ宜しくお願い致します。